

文明と教育の往還を読む

月刊『望星』五十年とデジタルアーカイブ

水島久光

みずしま・ひさみつ 1961年
生まれ。東海大学文化社会学
部広報メディア学科教授(情
報記号論、メディア論)。専門
テーマは、メディア環境のデジ
タル化とソーシャル・デザイン。

1 アーカイブ実践としての『メディア分光器』

月刊『望星』の目次に私の名前が出たのは二〇〇八年二月号「特集 テレビよさらば!」に、エッセイ「もう一度『テレビ』を!」を書かせていただいたのが最初である。ちょうど単著『テレビジョン・クライシス』(せりか書房)を刊行したのもこの年で、九月号には著者インタビュも掲載してくださった。そして翌年五月号から「メディア分光器」の連載もはじまり、それ以来十年にわたり毎月思うことを自由に書かせていただいている。

しかし私自身は、執筆者というより一読者としての雑誌と親しくお付き合いをさせていただいてきたと思

いが強い。毎号の「特集」や「連載」から、多くの刺激を受けてきたからだ。

この十年の間に私の仕事やものの考え方も随分と変化した。広い意味でメディア研究を生業としていることに違いはない。しかし連載を始めた頃は「テレビ研究者」を名乗っていたものが、最近では「地域映像資料」や「デジタルアーカイブ」に関して発言することが多くなってきた。

それは私自身の関心というよりも、メディア環境が大きくシフトした結果といえる。アナログ情報をベースに構築されたマスメディアの課題は、送り手と受け手のメッセージをはさんだ攻防で結構うまく語り、乗り越えることができた。しかし今は違う。社会や歴史、生きることを意味を、多様な人々と、共有することの

困難を日々実感する。

『メディア分光器』は、二〇一七年にこれまで書いたものを集約し単行本化させていただいたが、その際、さまざまな視点から解釈を組み立てられるような編集を試みた——「時の流れを読む」「対象を読む」「自らを読む」、そして「読書ノート」——この三つのインデックスと一つの巻末索引代わりのコラム、各々の「角度」から本文にアプローチができるような設計になっている。それは「アーカイブ的な読み」を企図したものであり、そこには全九十三本のエッセイ(フラグメント=断片)から、どのようなアジェンダセットイングが可能かを見通したいという狙いがあった。

もちろん一つひとつの断片を書いたその時は、そういった「読み」を全く意識していない。しかし数多くの「映像」を素材にしてアーカイブ実践を重ねてきた私には、一つの「仮説」があった。

「コレクションをカテゴリや予断を持って選別することなく、まるごと受け入れる。すると個々の作品の構成素が、まるでハイパーリンクを成すように作品の枠を破って相互に結びつきパターンを成し始める。まるで資料群そのものが、一定の秩序を自己組織していく中に、見る者が取り込

まれていく感覚である」(水島久光「映像アーカイブ研究の方法」(『東海大学紀要文学部』第一〇二輯、二〇一四)

映像もテキストも普通は、時間の継起に沿ってリニア(線形)に並んだ像と文字を追うことによって、その「筋」を捉えるものである。こうした「読む」作法を、我々は古来リテラシーと呼んできたわけだが、アーカイブはそれとは異なる意味との出会いを生み出す対象を群(あるいは情報のかたまり)としてそのまま捉えたときに、その瞬間は表れる——私は、それに「アーカイブ体験」と名づけ、新しいメディア環境の広がりとともに、不可避となった「認識論的転回」と考えるようになった。『メディア分光器』は、その実験装置となるよう編集したものである。

そうした「場」と「時間」を与えてくれた月刊『望星』が、現在のかたちのルーツたる第二次創刊(一九七〇年)から五十年を迎えるという。そして昨年暮れ、この通巻六〇〇号を超える歴史をもつ総合雑誌の記事をデジタルデータ化し保存する計画があると聞いた。このプロジェクトには「アーカイブ研究者」として関わる価値がある——直感した私は、早速、そのバックナンバーの合本をめくるために編集部に向かった。